2．妻木山地区の発掘調査概要

－妻木晩田遺跡第13次調査（重点調査）－

1．はじめに

妻木山地区７区の発掘調査は、重点調査長期計画第Ⅰ期、短期計画第２期に該当し、妻木山地区で行う３年目の重点調査である。発掘調査区は妻木山地区４区（第１次調査）の北側に隣接する（図１）。調査面積は約1,200㎡である。発掘調査の目的は、昨年度に引き続き、妻木晩田遺跡の最盛期にあたる弥生時代後期後葉の集落像の解明及び居住域縁辺部と推測される場所での居住単位のあり方の解明である。

2．第１３次発掘調査の概要

７区は、東西約70ｍ、南北約40ｍの東西に細長い調査区である。調査地は、妻木山地区と妻木新山地区の鞍部の南東に位置し、調査区南側に隣接する４区の溝状遺構（SD34）付近から７区にかけて、テラス状の緩斜面部になっている。調査区西側は、平成15年度内容確認調査（10ＭＫ）のＴ３に隣接する。４区には、第１次調査で検出された弥生時代後期中葉（SI146）から後期後葉（SI147、SI148）の竪穴住居跡３棟と後期後葉の溝状遺構(SD34)、その溝状遺構に伴う貯蔵穴(SK211、SK213、SK215）が３基ある。遺構検出面までの土層の堆積状況は、西側から東側にかけて厚くなっている。西側半分は、10ＭＫのＴ３、Ｔ４で既に堆積状況が明らかになっているとおり（濵田・河合・赤井2004）、耕作土の下に黒色土（Ｔ３の③層）が堆積している。この黒色土は古墳時代前期を下限とする堆積と考えられており、Ｔ３の④層上面とＴ４の③層上面が弥生時代の遺構面である。東側半分も、黒色土下が遺構検出面となるが、黒色土より上位に約60cmの厚さで版築された近現代のものと考えられる里道の堆積がある。この里道に伴う堆積は、互層状につき固められている点や出土遺物などから、10ＭＫのＴ２で確認した④層～⑧層に対応するものと考えられる。里道に伴う堆積物中からは、洋釘など近現代のものと考えられる遺物が多く出土した[1]。

また、黒色土中からは、弥生時代後期から終末期の土器片等が多数出土した。

今年度確認した弥生時代の主な遺構は、竪穴住居跡３棟である。他にピットや溝状遺構などを確認したが、全体的に遺構密度は薄かった（図２）。

3．竪穴住居跡の調査

妻木晩田遺跡の発掘調査では、丘陵頂部に遺構密度の希薄は空間があり、その周囲に竪穴住居跡が分布する状況が認められるが、７区では、居住単位の西側に遺構密度の希薄な空間が広がっている。

竪穴住居跡の時期や規模などを明らかにするために、各住居跡に幅70cmのトレンチを設定して掘り下げを行った。住居１・住居２は、住居跡内部の構造をさらに詳しく調査するために、ベルトを残して全体を掘り下げ、住居３はトレンチ調査に留めた。

住居１

弥生時代後期後葉（Ⅴ－３期）の竪穴住居跡である。検出面の平面形態は、楕円形を呈しているが、床面は隅丸五角形である。この住居跡は、南側の壁面に掘り込まれた貯蔵穴を伴っている。土層の堆積状況を住居跡と貯蔵穴の切り合い関係を考慮して検討した結果、貯蔵穴と住居跡は一連の堆積で埋まったと考えられるので、両遺構は併存するものと考えられる。

検出面の規模は長径6.52ｍ、短径5.69ｍ、住居跡部分の検出面から床面までの深さは、南側で0.74ｍである。貯蔵穴部分の検出面から底面までの深さは1.34ｍで、貯蔵穴の底面は住居床面よりも約10cm低く掘られている。住居跡の南側の床面は岩盤になっており、貯蔵穴はこの岩盤を掘り抜いて底面としている。貯蔵穴の底面は楕円形を呈し、規模は短径1.34ｍ、長径1.74ｍである。

主柱穴は床面の各隅に５本あり、平面的に柱痕を確認できる柱穴はなかった。住居跡中央には、中央ピットがある。一辺1.1ｍ、幅約12cmの周堤が方形にめぐる。内部には、中央より北寄りに直径34cm、深さ52cmの円形の穴が掘られている。

遺物は、住居跡床面直上から埋土の最下層にかけて約７個体の甕片が出土した。特に、住居西側にまとまって出土し、土器の直上からは拳大の礫が出土した。整理作業途中のため、今後の資料整理よっては完形近くまで接合する個体もあるかもしれないが、多くの個体は破片の一部が欠落した状態で廃棄されたものと考えられる。貯蔵穴内からは土器の小片が若干出土した。

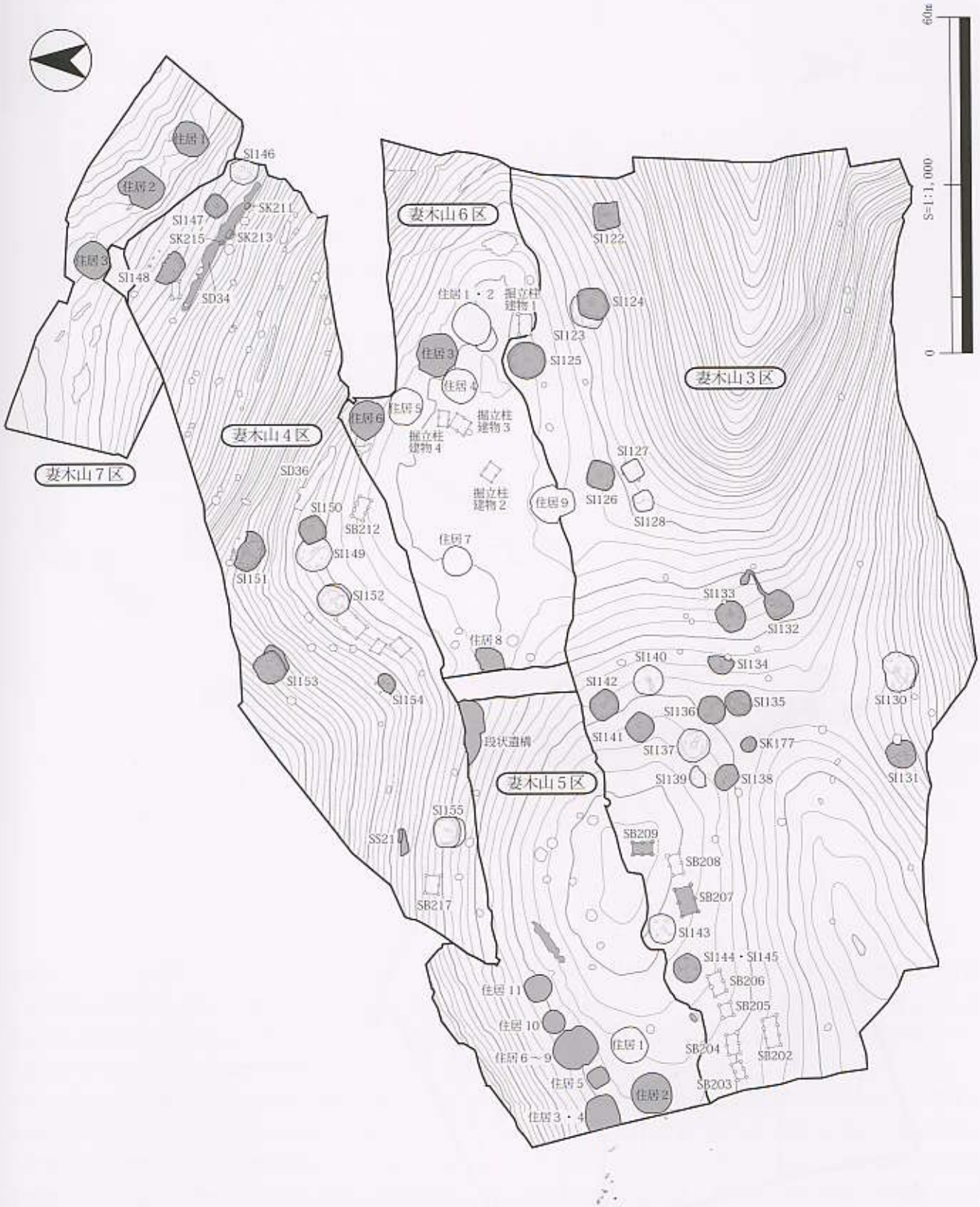


図１　妻木山３～７区主要遺構分布図（S=1/1000）
※アミカケは後期後葉の遺構

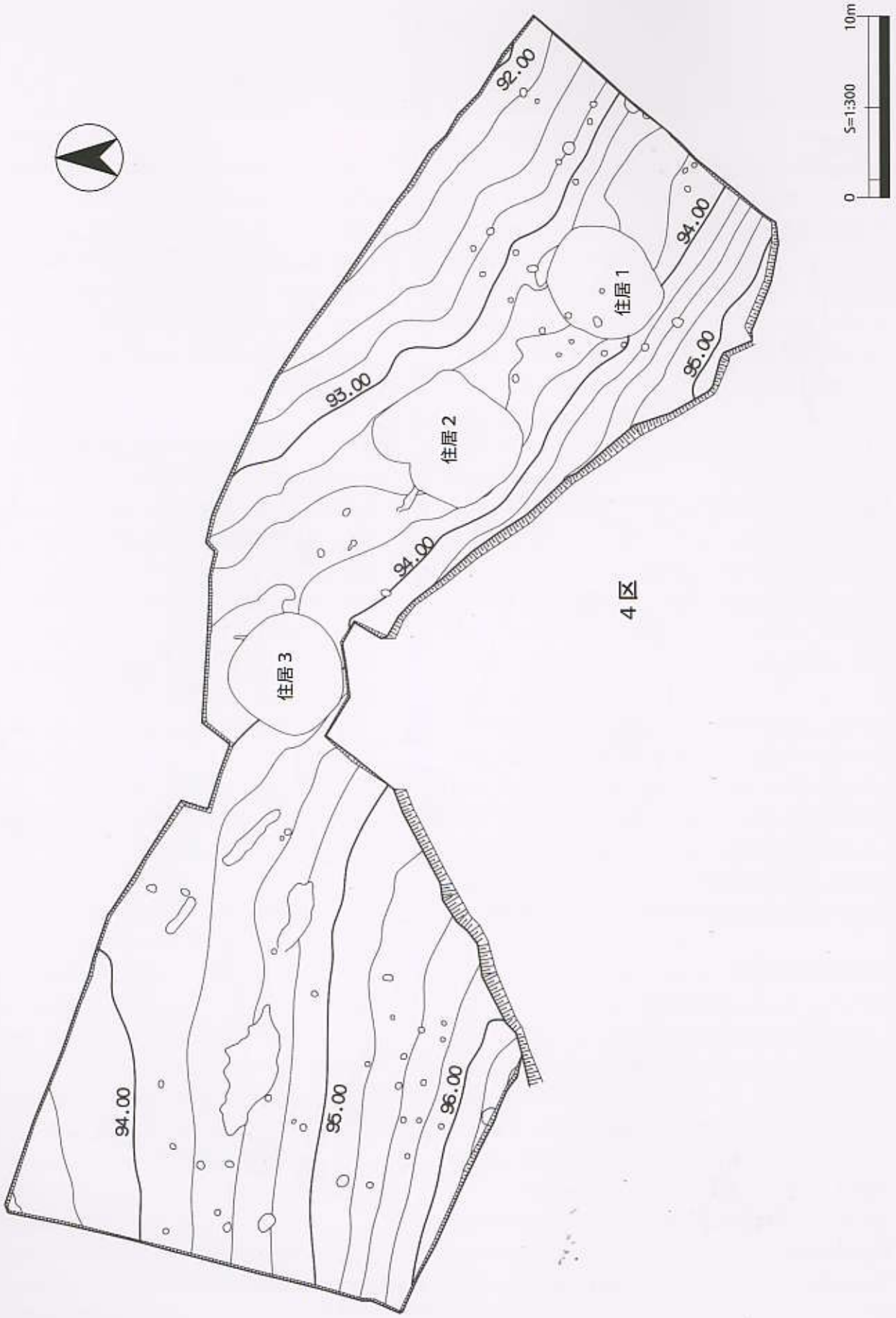
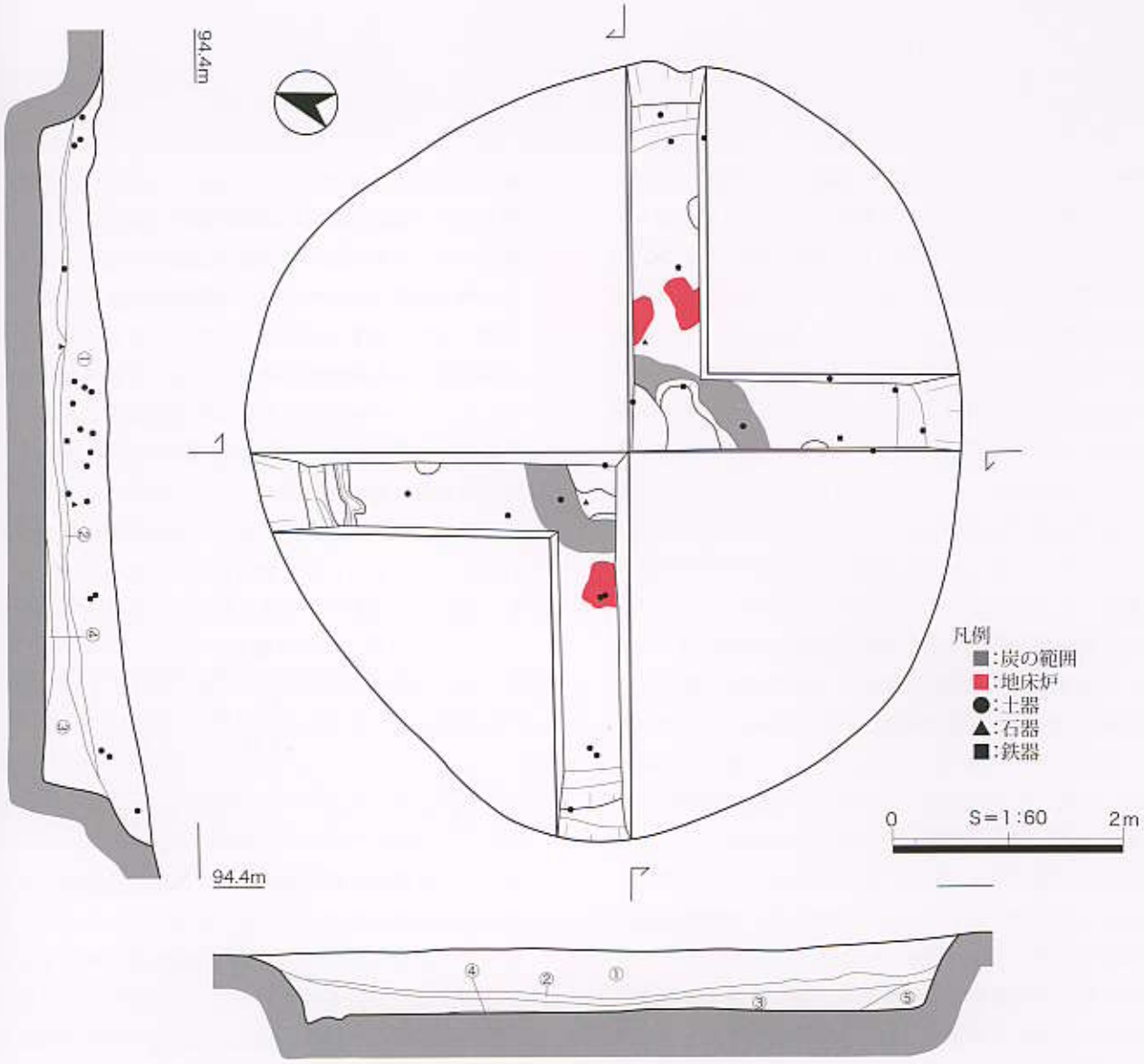


図２　妻木山地区７区全体図



①にぶい黄橙色土（Hue10YR6/2）2～5mm 程の炭粒を多く含む。
②褐灰色土（Hue10YR6/1）
③明黄褐色土（Hue10YR6/6）3～5mm 程の炭粒と周壁や床面となっている地山に類似する地山ブロックやパミスを含む。
④にぶい黄褐色土（Hue10YR5/3）3mm 程の炭粒を含む。
⑤灰黄褐色土（Hue10YR5/2）5mm 程の炭粒を含む。

図3　妻木山7区住居3

住居2

弥生時代後期後葉（Ⅴ－3期）の竪穴住居跡である。検出面は北西部分が歪な隅丸方形を呈している。内部は二段掘になっており、床面は若干南北に長い隅丸方形である。検出面の規模は長辺 7.6 m×、短辺 6.62 m、検出面からの深さは南側で最も深く 0.96 mである。

主柱穴は各隅にあり、南東隅の柱は若干中央に寄って配置されている。住居跡中央には、直径 0.62 mの円形の中央ピットがある。内部は二段掘になっており、底面までの深さは、44cm である。また、床面には非常に良く焼けた地床炉がある。地床炉は長さ約 88cm、幅約 40cm で不定形に広がっており、中心部は明赤褐色を呈し、外側にいくにつれて、色調が黒味を帯びるように変化する。この地床炉部分は 3 cm ほどの厚さで焼けている。

遺物は、埋土中から土器片が出土したほか、床面直上から砥石、敲石などの礫石器と網代状の炭化物が出土した。礫石器は地床炉と周壁の間あたりと、南側の周壁際に分かれて出土した。網代状の炭化物は、南東隅と南西隅の 2 カ所からまとまって出土した。南東側の炭化物は、カヤと思われる。それは、周壁に貼り付くような状態で出土し、残存状況は良くなかった。南西隅で出土した炭

化物は床面に貼り付くように、繊維方向を同じくする３～５cmを一つの単位として若干方向をずらしながら折り重なって出土した。ただ、残存状況は悪く、編み方などの詳細は現状ではわからない。これらの炭化物は、周壁に炭化物や焼土粒などがみられ、周壁溝内にも炭化物が多く含まれることから壁材の一部として使用されていたと推測できる。また、炭化物の下から土器片や礫石器が出土しており、敷物の可能性は低いと考えられる。なお、この住居跡からは、これ以外に炭化材や焼土などはほとんど出土しなかった。

住居３

弥生時代後期後葉（Ⅴ－３期）の竪穴住居跡である（図3）。平面形態は不整形な円形で、検出面の規模は長径6.74 m、短径6.48 mである。検出面からの深さが最も深いのは西側で0.98 mである。トレンチ調査に留めたので、主柱穴の数などは不明である。住居跡中央には、中央ピットがあり、周囲には地床炉がある。

土層の堆積状況は、概ね３層に大別することができる。床面直上に堆積する下層（③～⑤層）は、周壁や床面となっている地山（火山灰層）によく似た、炭粒を含む土層である。褐灰色を呈する中層（②層）は薄く全体的に堆積し、腐植土と考えられる。上層（①層）は、比較的厚く壁際から中央部にかけて全体に堆積し、炭粒を多く含む。これら一連の堆積から、住居跡の埋没過程は、下層が埋め戻された後、窪地の状態でしばらく放置されて、腐植土（中層）が発達し、その後周囲から土が流入して完全に埋没したと推測できる。遺物は、中層から上層にかけて多く出土し、下層からはあまり出土しなかった。

４．まとめ

今年度の発掘調査で、妻木山地区の重点調査は終了する。弥生時代後期後葉の居住単位のあり方を解明することを主目的とした調査を行い、一定の成果を得ることができた。

７区から４区にかけて調査した居住単位は、弥生時代後期中葉から後葉の比較的短期間に６棟の竪穴住居が切り合うことなく建てられている。この居住単位内での竪穴住居の変遷は、土器型式から２段階の変遷を考えられる。また、これまでの発掘調査では、埋土の最上層が腐植土（黒色土）で埋まっている竪穴住居跡は、その居住単位の中で比較的新しい時期に属する傾向がある。この黒色土は、その場所での居住が途絶えた後に発達するものと考えられるので（馬路・濵田 2003）、土器型式では同じ時期に属する竪穴住居跡であっても、埋土の違いで時期差のある可能性がある。さらに、妻木晩田遺跡の竪穴住居跡の平面形態は弥生時代後期後葉に円形から隅丸方形に変化し、隅丸多角形は減少することがわかっている（馬路・濵田 2003）。

土器型式、埋土の状況、竪穴住居跡の平面形態を組み合わせて考えると６棟で構成される居住単位は少なくとも３段階の変遷を経て形成されたと考えられる（表１）。

表１

	第１段階	第２段階	第３段階
住居番号	SI146	SI148・(SI147) 住居１・住居３	(SI147) 住居２
土器型式	Ⅴ－２	Ⅴ－３	Ⅴ－３
平面形態	円形	円形・多角形	隅丸方形

また、丘陵頂部と緩斜面部における貯蔵施設のあり方の違いも浮き彫りになってきた。こうしたあり方が、他の地区でも認められるのかなど、今後さらに検討する必要があるだろう。いずれにしても、これまでのような丘陵頂部を中心とした調査に加え、斜面部の利用のされ方も十分に調査していく必要がある。　（馬路晃洋）

註

１）版築された里道は近現代以降のものと考えられるが、それ以前から道として利用されていた可能性はある。

引用・参考文献

濵田竜彦他 2004「妻木山地区谷部の発掘調査―妻木晩　田遺跡第10次発掘調査―」濵田・馬路編『妻木晩田　遺跡発掘調査研究年報 2003』鳥取県教育委員会

馬路晃祥・濵田竜彦 2003「妻木晩田遺跡における竪穴　住居跡調査方針（案）」馬路編『妻木晩田遺跡発掘調　査研究年報 2002』鳥取県教育委員会